菅江真澄の見た北東北(2/3)

○菅江真澄の業績(HP「思い立ったら北東北」-「北東北こだわり百科」より)

-歩く・見る・記録する漂泊の旅人 菅江真澄(すがえ ますみ、1754~1829、三河(現・愛知県)生まれ) -

菅江真澄は三河(豊橋市・岡崎市両説)生まれです。30歳の時、北国を目指して旅に出ます。それ以前は、三河の近辺や京都・近江を旅していますが、主に薬学・本草学・国学などを勉強していました。その知識が後半生に非常に大きく役立っていることが判ります。30歳からの旅は、長野に始まり新潟・山形・秋田・宮城・岩手・青森・北海道に及んでいます。48歳の時、秋田(2度目)に入り、60歳頃から藩の助力で地誌編纂に取り組み、完成の陽の目をみず、仕事先の角館近辺で亡くなります。78歳でした。

菅江真澄の人生は、歩く・見る・記録することに終始しました。その生涯を賭けた見聞の記録(膨大な文章と挿図)を大事にした人でした。そのことは、文政 5 年 (1821) に日記などの著作 51 冊を秋田藩校明徳館に献納したことでわかります。

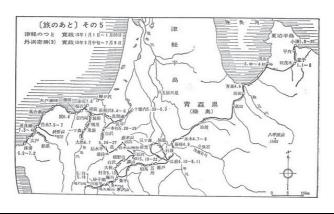
このすぐれた記録者は、すべてに偏見をもたず、批判的な言葉は慎重に避けています。農漁民や遊芸の人にも自分と同じ目線で接しています。対象に対し主観描写をしりぞけ、実証主義に徹しています。感情におぼれることなく、客観的な把握に努めているのです。

彼の見聞したフィールドは多岐にわたっています。薬草・鉱石・医術などの博物誌、農民・漁民・商人・遊芸人などの生活、その土地土地の故事来歴、その土地の景観の記録、その土地の祭・行事の見聞、庶民の生活用具の記録、行く先々で出くわした社会的事件や天災、人災、各地の民謡の採録、訪問先での、膨大な贈答歌、その他当時のアイヌ人の生活、住まい、祭りなど貴重な記録がいまなお残っています。

彼は終生、妻子をもたず、家を構えたこともありません。真澄の見聞の目的は、ただただ日本人の真の姿を知ることにありました。そのための自己犠牲であったのでしょう。あまり知られていない、みちのくの常民のありのままの生活ぶりを書き残そうとするには、相当の覚悟が必要だったのです。

柳田国男は、真澄の全人生についてこう書いています。

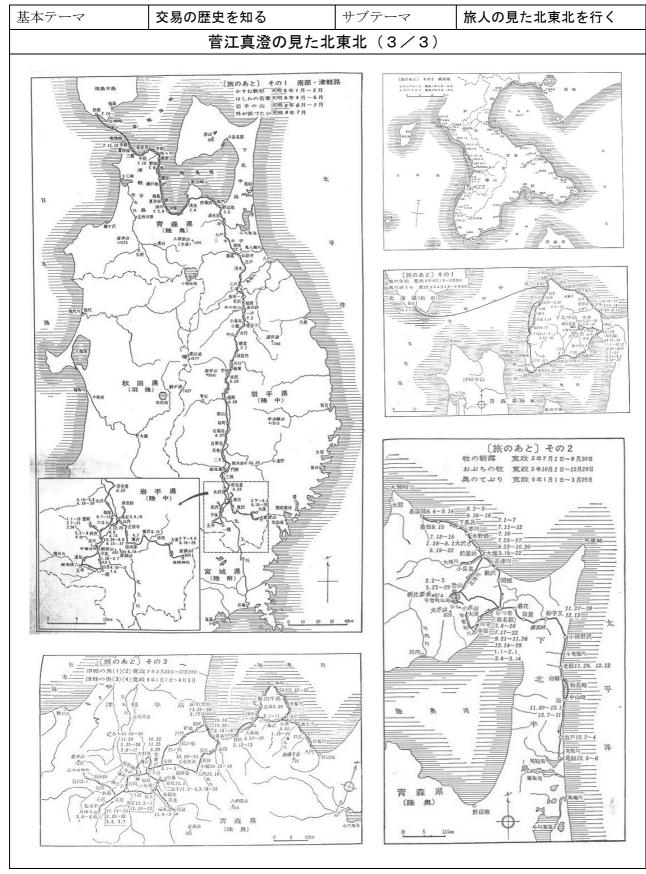
「天明八年といへば江戸でも京都でも、種々の学問と高尚なる風流とが、 競い進んで居た新文化の世であった。然るにそれとは歿交渉に、遠く奥州北 上川の片岸を、斯んな寂しい旅人が一人あるいて居たのである。」







資料;菅江真澄研究会 HP、「菅江真澄遊覧記」



資料;「菅江真澄遊覧記」

吉田松陰の見た北東北

◇「東北遊日記」

長州藩士にして西洋兵学の権威であり、幕末の思想家として歴史に名を残し、数え年30歳で刑場の露と世を去った吉田松陰が、池田屋事件で客死する宮部鼎蔵とともに、ロシア艦船がしばしば現れていた北方の海防状況を確かめるため留学中であった江戸を旅立ったのは、松陰22歳の嘉永4年(1851年)旧暦12月14日であったと伝えられる。

行程は140日間に及んだ。

その道中を記したのが「東北遊日記」である。そこには、松陰の見た東北が詳述されており、明治維新への道を拓いたとされる貴重な情報が収められている。

東北遊日記には、各地の藩制について詳しく記録されているほか、松陰の手による漢詩も収められている。



◇「東北遊日記」に見る北東北の風景

「東北遊日記」の中で松陰は、観光的な事柄は多くは書かれていないが、青森県十三湖岸の景色を「真に好風景なり」と書している。雪解けの頃の岩木山について「三峯魏然としてさながら富岳(富士山)の如し」と書している。弘前でも「弘前の杉(茂)森に劇場あり」と書している。元禄4年から昭和15年まで続いた芝居小屋「茂森座」のことである。

◇松陰のたどった道の現在

松陰のたどった道は、昭和 43 年に発足した「松陰先生足跡踏破の会」による活動を経て、現在は青森県内で「みちのく松陰道」と名づけられ、約 12km のハイキングコースとして利用されている。踏破の会は、その後「青森歴史の道整備促進協議会」に発展し、活動を展開している。大舘市赤湯から矢立峠を越える山道も「歴史の道・矢立遊歩道」として整備されている。

資料;国土交通省東北地方整備局ホームページ

イザベラバードの見た北東北

明治初期に来た日本を旅したイギリス人女性の見た北東北

\Diamond イザベラバードとは:

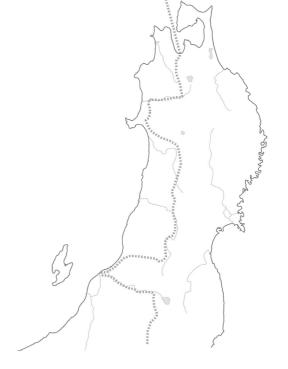
- ・明治初期に来た日本を旅したイギリス人女 性探検家
- ・会津,新潟,小国,米沢,赤湯,山形,金山,横手,秋 田,大館,碇ヶ関,黒石,青森などを経由

◇既往の歴史・文化:

- ○帰国後に著した「日本奥地紀行」で、明治以 降の劇的な変化を経て失われた、古き良き東 北の姿を伝える記録として貴重。
- ○2ヶ月余りで東北を縦断しており、この間各地域の豊かな地域性をいきいきと再現している。

◇紀行の特徴:

・東北を踏破した旅人として、菅江真澄と並 んで貴重な存在。



イザベラバードの足跡

〇イザベラバードの略歴

- 1831 英国ヨークシャーに牧師の長女として生まれる、病弱で19歳のとき手術を受ける
- 1854 医者に勧められてアメリカ、カナダを訪れる
- 1856 最初の旅行記「英国女性の見たアメリカ」出版
- 1872・73 オーストラリア、ニュージーランド、ハワイ、アメリカ・ロッキー山脈で過ごす
- 1874 「ハワイ諸島の6ヶ月間」出版
- 1878・79 日本訪問、日光より北海道をめぐる

香港、マレー、エジプトを経て帰国、「一婦人のロッキー山中生活」出版

- 1880 「日本奥地紀行」出版、1ヶ月で3版を重ねる
- 1883 「マレー半島紀行」出版
- 1889-90 チベット、ペルシャを訪れる
- 1891 「ペルシャ、クルジスタン旅行記」出版
- 1894-95 朝鮮半島、日本(長崎、関西)をめぐる
- 1896 中国西部、日本で静養後朝鮮へ
- 1898 「朝鮮とその隣国」出版
- 1899 「揚子江とその奥地」出版
- 1904 病没(72歳)

資料;日本奥地紀行

ブルーノタウトの見た北東北 (1/2)

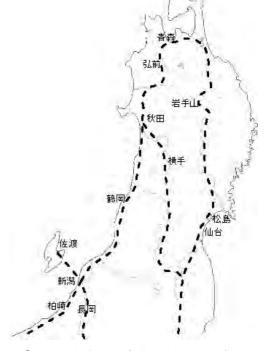
ナチスを逃れて日本に亡命し、桂離宮を世界に紹介したドイツ人建築家の見た北東北

◇ブルーノタウトとは

- ・世界的な建築家であり、桂離宮をはじめ として、伊勢神宮、飛騨白川の合掌造り の民家などを「世界に誇れる日本の建築 文化」として、世界に発信した。
- ・日本国内では建築作品はないが、伝統的 な素材を生かした工芸品づくりを指導し た。

◇ブルーノタウトと北東北

・足跡や記録は断片的にしか残されていないが、秋田の赤レンガ館などにおいて紹介されており、こけし工芸や伝統工芸に強い興味を示したようである。



ブルーノタウトの東北における足跡

年 譜

- 1880 北東ドイツの東プロジャ、ケーニヒスベルクに生まれる。
- 1909 ベルリンで建築恭務所を開く。
- 1913 「鉄の記念塔」で一躍注目を浴びる、
- 1914 「ガラスの家」で国際的評価を得る。
- 1930 ベルリン・シャルロッテンブルク工科大学の教授となる。
- 1933「日本インターナショナル建築会」の招待を受け来日。柱離宮と出会う。

絵画や陶器等の数々の名品と接し、多くの文化人や

芸術家と出会う。日本文化に関する著者を発表し始める。

- 1934 群馬県高崎市で工芸運動の指導に携わる。竹などの日本の伝統的な素材と技法を活かし独創性に富んだ工芸作品を発表。
- 1935 銀座「ミラテス」でタウトの工芸品が売り出される。

熱海・日向別邸の設計に取りかかる。

トルコ招聘に応じる。

イスタンブール芸術アカデミー建築科教授に就任。

1938 トルコボスボラス海峡を臨む自宅で死去

甘木テーマ	六日の麻中も知る	サブテーマ	女 1 の目も北南北 5 年 /
基本テーマ	交易の歴史を知る	777 - 7	旅人の見た北東北を行く

ブルーノタウトの見た北東北(2/2)

○ブルーノ・タウトの紹介

◇20世紀を代表するドイツの建築家◇

ドイツ近代を代表する偉大なる建築家。ベルリンを中心に、新しい素材を駆使した前衛的な作品を数多く発表。その先駆的な発想の高い芸術性により20世紀の最も興味深い先覚者の一人である。

まさに建築界における"知の巨人"ともいえるタウトは、建築の完全なる美を追い求め、ナチス政権から亡命し、日本文化に巡り会うこととなる。

◇「われ日本文化を愛す」◇

「それは実に涙ぐましいまで美しい」20 世紀初頭の日本の建築界のトップが集まる「日本インターナショナル建築会」の招待により、タウトが桂離宮を訪れた時の言葉である。賓客として桂離宮を始め伊勢神宮、飛騨白川など、日本建築の美に触れる機会を得たタウト。建築物だけでなく、広く日本の伝統芸術や当代一流の文化人達を歴訪し、独創的な著述、講演などを通してその評価、紹介につとめた。約3年半の日本滞在の後、タウトは更にトルコに旅立つ。この"美の航海者"タウトは「われ日本文化愛す。」という言葉を群馬県高崎市少林山の石碑に残した。

◇高崎だるま寺に居住していたタウト ◇

"知の巨人" "美の航海者" ブルーノ・タウトが日本で最も長く滞在した場所が群馬県高崎市の少林山達磨寺境内の「洗心亭」である。彼が青春時代を過ごしたベルリン郊外のコリーンに似た高崎の田園風景を眺めながら、およそ2年間、この地を拠点として、建築物に限らず、様々な芸術的工芸作品を数多く制作していった。日本文化を愛し、日本で独自の芸術活動を展開していったタウト、高崎市、群馬県が次世代へと語り継ぐべき時代を超えた文化人なのである。

資料;ブルーノタウトの映像をつくる会 HP